

子宮がキュウンと甘く疼いた。

「ご主人様っ。奴隷の私を、す、好きなように、扱ってくださいっ!!」

由馬は、尻穴を拡張していた指を取り去ると、ドスツと男根を膣奥に向かって突きこんだ。

「きゃああああああんっ!!」

ラピスは、羽根をバサツ、バサツとはためかせながら、身体をブルブルツと震わせた。お願いもつと奥までオチンメンをちようだい、とばかりに腰が上がる。

ラピスの膣ヒダは狭いところが五カ所ほどあるのだが、その部分は彼女にとっても亀頭のエラがこすりながら前後する感触がたまらない。フワツと身体が宙に浮く。その錯覚は、ラピスの目をくらませた。

Gスポットが熱く発火し、さらさらした潮がドブツと噴きだす。あとひと突きかふた突きで昇天するとうまさにそのとき、由馬がペニスを引き抜いた。

「えっ、ええっ!? ぬ、抜くなっ! 抜かないでっ。ご主人様っ、せ、精液をつ、精液をくださいっ」

おろおろしているラピスのお尻の穴に、熱いものが押し当てられた。拡張訓練のあとも生々しく、魚の口のようにポツカリと開いた尻穴に、ペニスがめりこんでいく。

メリツと不気味な音がした。

「うあああつ、い、痛いっ、痛いいいいっ！ お尻が割れるうっ!!」

ラピスは悲鳴をあげ、腕に力を入れて上半身を起こすと、四つん這いのままで前に向かって這いずろうとした。汗みずくになった手が滑り、すぐに頭が落ちてしまうが、それでも必死に逃れようとがく。

「死ぬっ、やめろおつ、死んでしまうつ」

本来の使われ方とは違うことをされているせいで、尻穴はメリメリ、ミシミシと恐ろしい音をたてている。ラピスにはアナルセックスの知識はなく、奴隷どころか人体実験をされている動物の気分になっていた。

苦しさと息苦しさがペニスが沈むたび倍加していき、身体が破裂しそうになったとき、ペニスがずるずると抜けはじめた。

そのとき、息がとまりそうな苦しさが、フワツと甘い開放感へと一瞬で変化した。

さつき、膣でセックスしたときほんの少し覚えた浮遊感よりも、ずっとずっと濃密な、甘い気持ちよさである。まるで暗い穴蔵から、花の咲き乱れる草原に走りでた気分だ。

「あああああつ。気持ちいいッ!!」

ラピスは甘い声をあげ、頭をぶるんと振った。ツインテールが揺れ、三日月のネッ

クレスが胸の谷間で揺れる。背中の黒羽根がバサツとはためく。

由馬は悲鳴に近い声をあげた。

「ほ、僕もっ、ウッ！ 気持ち、いいよっ」

自分の命を狩りに来た神様を組み伏し、こんなことまでしているという勝利感がそうさせるのか、アナルセックスの気持ちよさはノーマルなセックス以上だった。

膣のような感触の複雑さはないが、つるつるの直腸粘膜がキュウキュウとまとわりつき、生ゴムのような粘着感で締まる。なによりすばらしいのは、突きこむときの、粘膜が抵抗する感じだった。それがムリヤリ感をけしかけて、力づくで組み伏している気分になる。

真っ白なお尻の谷間で、小さなお尻の穴がいつぱいに口を開き、自分のペニスが出たり入ったりする様子が見える。

ラピスは苦痛の叫び声をあげた。

「あああああっ!!」

亀頭のエラがお尻の穴の裏側に当たったと思う間もなく、ペニスが再び尻穴深く穿^{うが}



ってきた。

「く、くるしいっ、や、やめろっ！ き、きさまあっ!!」

さっきまでの甘い開放感が、割れそうなほどの膨張感へと一瞬で変わったのだ。空を飛んでいたら、いきなり地上へと落下したようなもので、振幅の大きさに翻弄ほんろうされるばかりだ。

まるでバンジージャンプだった。落ちたと思うと反動であがり、あがったと思うと引力で落ちる。そのたびに身体全体がシェイクされて、思考力が粉碎される。

「えっ？ ラピスっ、ど、どうしたのっ!？」

由馬はあわてた。ラピスの反応は、エロコミックでなんとなく想像していたアナルセックスよりも激しすぎ、とまどってしまふ。

ペニスを前後するたびに、ラピスの反応がはつきり変わり、苦痛と快感を交互に訴えるようになった。

「うっ、ううっ、と、とまらないよっ。ごめんっ!!」

汗にまみれた背中がうねくり、黒羽根がバサつく。ラピスが強烈な感覚に煩悶はんもんしていることがビジュアルとしても伝わってくる。